

実践哲学ノート (13)

谷口 孝男

Notizen über die praktische Philosophie (13)

Takao TANIGUCHI*

Abstract

Die vorliegende Arbeit forscht nach dem Sinn des Menschen als menschliches Naturwesens. Der Kern des Sinnes des Menschen ist aber nichts anderes als Menschlichkeit (Humanität). Also behandle ich die praktische Philosophie überhaupt, namentlich die menschliche praktische Philosophie Yoshiaki Utsunomiyas. Dabei zugleich möchte ich sein Denken selbst und auch seine Denkweise lernen.

Danach möchte ich den Sinn des menschlichen Naturwesens auf Grund der Menschlichkeit (Humanität) aufklären und ferner den Menschen an sich selbst als systematische Totalität der drei Lebenstätigkeiten, die aus Konsumieren, Produzieren und Verkehren bestehen, zeigen.

Der Sinn des Menschen enthält die Menschlichkeit (Humanität) als sein übergreifendes Moment in sich. Daher müßten wir vor allem die Menschlichkeit (Humanität) untersuchen.

第一部 『哲学の視座』

第三章 「 - 2 哲学者と知恵 - カントのフィロソフィアについて - 」

第二節 「第四の問いの意義」[続]

*第10段落の「読解」の後、本筋の『哲学の視座』をよりよく理解するための枝道に長く入り過ぎたようにも思え、今後は、本筋は本筋として貫きながら、それと並行して、カントその他との「対話」をしてゆく方針に転換しよう、と思う。ただ、「第二節」の(7)から(10)までは、あちこちに散在しているので、宇都宮氏の本文だけであるが、再録しておきたい。詳しくは、該当箇所を見られたい。さらに、「 - 2 哲学者と知恵 - カントのフィロソフィア - 」全体の「目次」を掲げておくことにする。

目次

一 四つの問い

二 第四の問いの意義

三 「学的な生の知恵」としての哲学

四 定言命法の意義

五 『人間学』の性格

(7)

「私は何を知りうるか」、「私は何をなすべきか」、「私は何を望んでよいか」、という三つの問いにおいて、問いを発している「私」は、批判哲学者としてのカント自身の「私」である。したがって、「私の理性の関心」は、批判哲学者カントの理性の関心〔志向〕である。「何を」という問いの対象の地平において、カントの理性の関心〔志向〕は、自己の知識と行為と願望の対象にむけられている。しかし、何を知りうるか、何をなすべきか、何を望んでよいか、という問いは、すでにその問いのうちに、何を知りえないか、何をなすべきでないか、何を望んではならないか、という問いを含んでいる。さらに言って、これらの問いは、知りうることと知りえないこと、なすべきこととなすべきでないこと、望んでよいことと望んではならないことの「区別」と「分離」についての問いを含んでいる。」

(8)

「したがってこれらの三つ〔の〕問いは、「何を」という理性の関心〔志向〕の対象についての問いであると同時に、そうした対象を問う理性の関心〔志向〕そのもののあり方を その可能〔できる〕と当為〔すべし〕と権限〔してよい〕とに関して 吟味する問いである。そしてこのような理性の自己吟味こそ、カントの言う「批判」の原初的な意味である。「理性は、その一切の企図において、批判を受けなければならない。いかなる禁令も……批判の自由を妨げることはできない。……何が重要であると言って、何が神聖であると言って、……この吟味し検査する探索を免れうるほど重要であり神聖であるものはない。……しかも理性の存在は、この自由に基づいている。」(4)

(4) K. d. r. V. ;B. 766.

」

(9)

「私は何を知りうるか、等々の問いにおいて、問いを発している「私」は、自らの理性を自由に吟味し検査する「批判」哲学者カントの「私」である。しかもこれらの問いは、あくまでも「理性の関心〔志向〕」についての理性の自己吟味であるから、「純粹哲学の領域」に属する問いである。「純粹理性がわれわれに提示する一切の概念は、否、一切の問題すらも、決して経験においてではなく、それ自身ふたたび理性において存するので、したがってそれらは解決されえなければならぬし、その妥当性と非妥当性とに関して理解されなければならない」(5)というのが、カントの主張である。理性の関心〔志向〕についての吟味は、経験に訴えることを必要としない。批判は、純粹哲学の領域に属する仕事である。ところで、それではこの三つの問いは、なぜ第四の問いに、すなわち「人間は何であるか」という問いに、「かかわる」のであろうか。

(5) K. d. r. V. ;B791.

」

(10)

「先に引用した『論理学』の箇所に先立つ箇所で(6), カントは, 哲学の「学校概念」と「世界概念」の区別に触れている。学校概念に従えば, 哲学は, 「哲学的認識あるいは概念からの理性認識の体系」である。これに対して, 世界概念での哲学とは, 「人間理性の究極諸目的の学」である。哲学の後者の概念, すなわち「この高次の概念」が, 哲学に「尊厳」を, つまり「絶対的価値」を与える。「そして実際にも哲学はそうであって, この哲学のみが内的価値をもち, 他の一切の認識にはじめてある価値を与える。」

(6) Logik; Bd. 9, S. 23f.

(11)

「カントはさらに, 学校概念による哲学と世界概念による哲学とを, 「熟練の教え [eine Lehre der Geschicklichkeit]」[カントからの引用はアカデミー版による; Logik; Bd. 9, S. 24]と「知恵の教え (eine Lehre der Weisheit)」(ibid.) というふうにそれぞれ定義し, 後者における哲学者を「立法者 (Gesetzgeber)」[ibid.] とよんで, これを「理性技術者 (Vernunftkünstler)」[ibid.] から区別する。「理性技術者は・・・・・たんに思弁的知識を追究し, その際知識が人間理性の究極目的にどれほど寄与するかを問題としない。彼はあらゆる任意な諸目的に対する理性使用の規則を与える。実践的な哲学者, すなわち教えと実例とによる教師が, 本来の哲学者である。なぜなら, 哲学は, 完全な知恵の理念であって, このものがわれわれに人間理性の究極諸目的を示すからである。[Der Vernunftkünstler・・・・・strebt bloß nach speculativem Wissen, ohne darauf zu sehen, wie viel das Wissen zum letzten Zwecke der menschlichen Vernunft beitrage; er giebt Regeln für den Gebrauch der Vernunft zu allerlei beliebigen Zwecken. Der praktische Philosoph, der Lehrer der Weisheit durch Lehre und Beispiel, ist der eigentliche Philosoph. Denn Philosophie ist die Idee einer vollkommenen Weisheit, die uns die letzten Zwecke der menschlichen Vernunft zeigt. / ibid.]」かくして, ふたたび世界概念としての哲学に定義を下すならば, それは「一切の認識と理性使用とを人間理性の最終目的にかかわらせる関係の学 [die Wissenschaft der Beziehung alles Erkenntnisses und Vernunftgebrauchs auf den Endzweck der menschlichen Vernunft / ibid.]」であって, 「最高目的としてのこの最終目的に, 他の一切の諸目的は従属し, それらはこの最終目的において統一へと合一しなければならない [dem (Endzweck), als dem obersten, alle andern Zwecke subordinirt sind und sich in ihm zur Einheit vereinigen müssen / ibid.]」。そして以上に続いて, 世界概念としての哲学に属する問いとして, 先の四つの問いが提起されるのである。」

[対話]

宇都宮氏は, 目下, 「三つの問い (私は何を知ることができるか? 私は何を為すべきか? 私は何を希望することが許されるか?)」と「第四の問い (人間とは何か?)」との「関係」を話題としている。カントは, 「最初の三つの問いは最後の問いに関係している [sich die drei ersten Fragen auf die letzte beziehen / Logik; Bd. 9, S. 25]」と言う。

この段落において, カントの「世界概念としての哲学」は, 理性の諸知識や諸目的を統一する理性の最終目的 = 究極目的を定めることが宣言されているのである。『論理学』では, このように述べられている。

(12)

「カントはまた、『純粋理性批判』でも(7)この二つの哲学の区別について語っている。学校概念としての哲学は、「学としてのみ求められ、この知識の体系的統一、したがってまた、認識の論理的完全性以上の何ものをも目的としない認識体系 [System der Erkenntnis, die nur als Wissenschaft gesucht wird, ohne etwas mehr als die systematische Einheit dieses Wissens, mithin die logische Vollkommenheit der Erkenntnis zum Zweck zu haben / Bd. 3, S. 542]」である。これに対して、世界概念としての哲学は、「すべての認識を人間理性の本質的な諸目的にかかわらせる関係についての学 [die Wissenschaft von der Beziehung aller Erkenntnis auf die wesentlichen Zwecke der menschlichen Vernunft / ibid.]」である。この概念はしばしば「人格化 [personifizierte / ibid.]」され、「哲学者という理想において原型として表象される [in dem Ideal des Philosophen sich als ein Urbild vorstellte / ibid.]」が、この場合の「哲学者 [der Philosoph / ibid.]」とは、「理性技術者 [ein Vernunftkünstler / ibid.]」ではなく、「人間理性の立法者 [der Gesetzgeber der menschlichen Vernunft / ibid.]」である。

(7) K. d. r. V. ;B 866 ff.

[対話]

鮮やかな論述、という他ない。「第四の問いの意義」が鮮明に浮かび上がってくる。カントによれば、哲学には二種類ある。はっきりと言えば、「学校概念としての哲学」は「にせの哲学」、「世界概念としての哲学」は「ほんとうの哲学」、ということであろう。前者は「理性技術者」によって作られる。理性技術者とは、理性を道具または手段として、知識の体系を築く者のことであろう。

「ほんとうの哲学」は、「人間理性の立法者」によって作られる。カントは、なぜ「理性の立法者」と言わずに、「人間の理性の立法者」と呼ぶのであろうか。おそらくカントは、神の理性との比較において、有限な人間の理性であることを、告げなかったのではなからうか、と思う。

(13)

「これはまた、カントによると、「理想における教師」であって、この者は「一切の理性認識を評価し、それらを人間理性の本質的な諸目的を促進するために利用する」。したがってまた、複数としての「本質的な諸目的」は、いまだ単数にして唯一の「最高目的」ではない。それゆえ、諸目的は、「究極目的」と「究極目的に手段として必然的に従属する従属的な諸目的」とに、区別される。ところでその究極目的は、「人間の全規定」であって、これについての哲学が「道徳」である。「道徳哲学が他のすべての理性活動に対して持つこうした優位のために、ひとはまた古人であっても、哲学者という名でつねに同時に、しかもとりわけて道徳家を理解した」のである。」

[対話]

本質的な諸目的 { 究極目的 (最高目的) ・ ・ ・ 人間の全規定 ・ ・ ・ 道徳 (哲学) ・ ・ ・ 知恵
究極目的に仕える従属的諸目的 ・ ・ ・ 諸知識

人間理性の究極目的ないし最高目的は、「道徳(哲学)によって、人間の全規定[使命]を明らかにすること」である。「人間の全規定」を問うことは、「人間とは何か」と問うことに等しい。すなわち、「第四の問い」は、人間理性の究極目的(最高目的・最終目的)を問うているのである。このようなことは、「学校概念としての哲学」の制作者を含む理性技術者一般のよく関知しないものかも知れないが、自らの理性使用を「人間らしく善く生きること」という最終目的に結びつけることなしには、折角の理性使用もなんの価値も意味も見だし得ないことであろう。およそ人間にとって、「人間らしく善く生きること」は、いわば「最後の言葉」「人間のアルケー」なのであって、そこから人間に関わる一切の価値や意味が湧出してくる根源なのである。

(14)

「[最高目的(第四の問い)と本質的諸目的(三つの問い)]前後の脈絡から明らかなように、『論理学』での「究極諸目的」は、『批判』での「本質的な諸目的」に、『論理学』での「最高目的」あるいは「最終目的」は、『批判』での「最高目的」あるいは「究極目的」に、『論理学』での「本来の哲学者」、「実践的な哲学者」あるいは「知恵の教師」は、『批判』での「道徳家」あるいは「理想における教師」に、それぞれ対応する。私は何を知りうるか、何をなすべきか、何を望んでよいか、という三つの問いにおいて、カントの「批判」哲学は、理性の「究極諸目的」に、「本質的諸目的」に、かかわっている。しかしこれらの問いは、さらに「最高目的」である「人間の全規定」にかかわる問いによって、つまり「人間は何であるか」という問いによって、規定され、統一される。したがってまた、「人間は何であるか」という問いを発しているカントは、「本来の哲学者」としてのカントである。あるいは、「本来の哲学者」なるものが、カントの言うように理想にすぎないのなら、ここで問いを発しているカントは、すくなくともそうした理想としての「本来の哲学者」を志向している哲学者としてのカントである。」

[対話]

議論を図示して整理しておこう。

『論理学』	『純粋理性批判』	カントの立場
究極諸目的	本質的な諸目的	三つの問いを発する「批判哲学者」としてのカント
最高目的・最終目的 (知恵)	最高目的・究極目的 (道徳)	第四の問いを発する「本来の哲学者」としてのカント
本来の哲学者・実践的な哲学者・知恵の教師	道徳家・理想における教師	カントが理想とした哲学者像 (反対概念は理性技術者) モラリストたる知恵者

宇都宮氏は、カント哲学の内部構成、あるいはカントという人の哲学的思索の根本を突き止めようとしているのである。その課題は、たんなる知識を求める観照的なものではなく、あくまで

生きる知恵を探究する実践的なものである。「三つの批判的問い」と「第四の哲学的問い」の関係が、執拗に追求されるのも、この両者の立体的な関係のなかに、カント哲学の根源がある、との考えに導かれてのことなのである。宇都宮氏によれば、「三つの批判的問い」は、「第四の問い」によって、「規定され、統一される」。すなわち、「人間は何であるか」を明らかにするために、「三つの批判的問い」に答える必要があったのである。

こうして見れば、カントもまた、哲学の歴史の正道を歩んでいることが判然とする。

「倫理学は、さらに、哲学の一部分であるだけでなく、実は哲学の中枢に位置する学問である、と言うこともできる。なぜなら、ソクラテス以来、哲学の中心課題は、人間はいかに生きるべきか[人間は何であるか]という問いに答えることにあったと見ることができるからである。」(宇都宮氏前掲『倫理学入門』, 5頁)

(15)

「[三つの問いと第四の問いの連関はカント固有の主体的実践的連関]私は何を知りうるか等々といった「批判哲学者」カントの問いと、人間は何であるかと問う「哲学者」カントの問いとの関連性は、問いの対象 - 人間理性の諸規定と人間の全規定 - の地平においてではなく、問いを発しているカント自身の哲学に関する問題意識の地平において考えられなければならない。批判は、理性の諸能力の吟味を主題とする。しかし一体に、なぜ理性の諸能力の吟味が必要なのであろうか。またその批判は、吟味は、何のために必要なのであろうか。カントはそれを、「知恵[道徳]」のために、と答える。本来の哲学者は「知恵の教師」であることを必要とする。世界概念としての、すなわち語の本来の意味での哲学は「知恵の教え」であり、また[《 》諸々の知識[》]を知恵のために整えるという点では「知恵への途[der Weg zur Weisheit]」(8)であり、「知恵のオルガノン[das organon zur Weisheit]」(9)である。

(8) Kant § handschriftlicher Nachlaß; Bd. 16, S. 70.

(9) ibid. ;S. 68.

[対話]

「人間は何であるか」と問うのは、生きる「知恵」を身につけるためである。興味やたんなる知識のためではない。カントの批判の主題は「理性の諸能力の吟味」にあるが、カントにおいてなにゆえに「批判」が必要であったのであろうか。カントによれば、それは「知恵」のためである。カントの考えでは、そもそも「哲学(フィロソフィア)」とは「知恵の教え」「完全な知恵の理念」であり、「知恵を愛すること」なのであった。

知識と知恵は、厳格に区別されなければならない。本来、知識は、それだけで自己充足できるものではなく、また己れの認識価値を自ら判定できるものではない。それに対して、知恵は道徳ないし倫理(人間とは何であるか)のことであるが、それは、そしてそれだけが、さまざまな知識の認識価値を判定できるものである。人間の生きることの中心的なもの、最後のなものは、道徳的な知恵ないし倫理的な知恵でしかあり得ないのである。(今日の「応用倫理学」はこの理法の顕現である。)知識と知恵の関係は、「諸々の知識を知恵のために整える」という点にある。

(16)

「全体は部分に先立つ」私は何を知りうるか、等々の批判的な問いは、知恵を求める「人間は何であるか」という問いに「かわる」ことによって、はじめてその意義をもつ。列記された問いの順序に従えば、はじめの三つの問いが問われて、その後それらの問いをしめくくるものとして「人間は何であるか」という問いが続くことになるが、問いを発しているカント自身の哲学の内部では、最後の問いが最初にくることになる。カントがこの「最後の」問いで求めている「人間の全規定」は、人間の理性の諸能力やあるいは人間の心情の諸能力がそれぞれ部分的に吟味され規定された後に、あらためてそれらをつぎ合わせることによって生ずる[、]いわば二次的な人間の規定のことではない。かりに「全体」と「部分」という対比をとるにしても、全体はつねに部分に先立つ。「人間は何であるか」という問いは、人間の諸能力についての一切の問いを先導する問いである。理能力や心情能力の吟味は、さらに言って、そうした能力をさまざまに分解し整理することすら、「人間は何であるか」という問いによってまず規定されている。カントの立場に戻って言えば、まず「人間は何であるか」と問う「哲学者」カントがあり、その精神に基づいて、私は何を知りうるか、等々のカントの「批判」哲学が展開されるのである。」

[対話]

前段落では、主として「諸知識」と「知恵」の関係を問題にした。この関係は、大雑把に言えば、「諸科学」と「本来的哲学」の関係である。

本段落で論じられているのは、カントにおける、「批判」と「本来的哲学」との関係、すなわち「三つの批判的問い」と「第四の哲学的問い」との関係である。列記された順序とは違って、「カント自身の哲学[的思索]の内部」においては、最後の第四の問いが、「最初の問い」であり、「三つの批判的問い」を先導している、と見なければならぬ。宇都宮氏は、このことが「かわる(sich beziehen)」[Logik, Bd. 9, S. 25]ということの真意である、と見られるのである。

カントの「批判哲学」の存立根拠は、「人間は何であるか」を問うフィロソフィア(知恵を愛し求める学)にこそ認められる。それゆえ、カントの哲学を「批判哲学」に収斂させるのは、カント哲学を誤解に導くものなのである。

(17)

「理性技術者あるいはフィロドクス」では、もし人間は何かという知恵についての問いが「理性の一切の関心[三つの批判的問い]」に先立ち、それらを導く、ということがなければ、事情はどうであろうか。その場合には哲学者はもはや「哲学者」ではなく、たんなる「理性技術者」である。「理性技術者は……たんに思弁的[理論的]知識を追究し、その際知識が人間理性の究極目的にどれほど寄与するかを問題としない[Der Vernunftkünstler……strebt bloß nach speculativem Wissen, ohne darauf zu sehen, wie viel das Wissen zum letzten Zwecke der menschlichen Vernunft beitrage; / Logik, Bd. 9, S. 24.].」この者はカントに言わせれば、もはや知恵を愛する者としての哲学者ではなく、「臆見を愛する者」、すなわち「フィロドクス」[10]である。フィロドクスは、なるほど「あらゆる任意の目的のための[理性]使用に対する規則を与える[er giebt Regeln für den Gebrauch der Vernunft zu allerlei beliebigen Zwecken / ibid.]」が、人間理性の最高目的である知恵を問い、それを愛する、ということをしなない。したがって、たとえ彼がいかに理路整然とした思弁的[理論的]体系を樹立しようとも、その体系は知恵を愛し求めている点でまった無価値である。知識はすべて、それが知恵に、知恵の学である哲学に、

かかわり [Beziehung] をもつことによって、はじめてそれぞれの価値を有することになる。

(10) Logik; Bd. 9, S. 24.

」

[対話]

前段落と本段落は、ずばりと言えば、カントが捉えた、「ほんとうの哲学」と「にせの哲学」を分けるものについて、まとめる。前段落は「ほんとうの哲学」について、本段落は「にせの哲学」について、「最後通告」が出される。

「人間とは何か」という問いは「最初にして最後の問い」であり、知識 (Wissen) の営みが、この問いとはかかわりなしになされるとき、その営みは、いわば羅針盤のない航海にも比せられるであろう。

知恵 (Weisheit) とは「人間のアルケー」すなわち「人間の原理」、言い換えれば、人間を統一的全体にまとめあげる総括的原理のことであろう。そのような「人間のアルケー」としては、「道徳 (Moral)」しか考えられない。それゆえ、知恵とは道徳のこと、道徳とは知恵のこと、なのである。

こうして結局、知恵すなわち道徳とは、「人間は何であるか」、「人間はいかに生きるべきか」についての主体的実践知である、と言えよう。この意味での「知」を愛し求める人は、「フィロソフオス (ほんとうの哲学者)」と呼ばれてよいし、反対に、このような「知」を愛し求めもしない人は、「フィロドクス (にせの哲学者)」と呼ばれるのがふさわしいであろう (なお、プラトン『ポリテイア』480Aを見られたい)。カントは、フィロドクスのことを、「理性技術者 (Vernunftkünstler)」と呼ぶのである。*

* 「理性の技術者もしくはソクラテスのいわゆる臆見を愛する人 [フィロドクス] (Der Vernunftkünstler oder, wie Sokrates ihn nennt, der Philodox / Logik, Bd. 9, S. 24.) と、カントは語っている。

(18)

「これ [知識はすべて、それが知恵に、知恵の学である哲学に、かかわりをもつことによって、はじめてそれぞれの価値を有することになる、ということ] は哲学 [にせの哲学] 以外の、多識を誇る諸学においても、同様である。カントは言っている。「一定の限界のない歴史的知識は、多識 (Polyhistorie) であって、このものは驕慢である。……たんなる多識は、一眼人的学識であって、これはいま一つの眼を欠いている - [ほんとうの] 哲学の眼を。そして数学者、歴史学者、博物学者、文献学者、および語学者の一眼人は、これらすべての部門においては偉大であるが、しかしそれらについての一切の [ほんとうの] 哲学を不必要とと思っている学者である [Das historische Wissen ohne bestimmte Grenzen ist Polyhistorie ; diese blüht auf. … Die bloße Polyhistorie ist eine zyklische Gelehrsamkeit, der ein Auge fehlt, das Auge der Philosophie, und ein Cyklop von Mathematiker, Historiker, Naturbeschreiber, Philolog und Sprachkundiger ist ein Gelehrter, der groß in allen diesen Stücken ist, aber alle Philosophie darüber für entbehrlich hält. / Logik, Bd. 9, S. 45.]。」「[11] 『人間学』の遺稿では、カントはこの「第二の眼 [いま一つの眼] [Das zweite Auge]」を「人間理性の自己認識の眼 [das der Selbsterkenntnis der Menschlichen

Vernunft]」]とよんでいる。「この眼がなければ、われわれはわれわれの認識の大いさを目測する能力をもたない。この眼は、測量の基線を与える [ohne weiches wir kein Augenmaas der Größe unserer Erkenntnis haben. Jene giebt die Standlinie der Messung.]」[12] われわれはここに、カントの、知恵の愛(哲学) = 理性の自己認識 = 理性の自己吟味(批判)といった、哲学的志向の連鎖を見出すであろう。そしてこれらの志向を支えているのが「人間は何であるか」という問いにほかならないのである。

[11] Logik, Bd. 9, S. 45.

[12] Kant § handschriftlicher Nachlaß; Bd. 15, S. 395.

[対話]

諸科学とほんとうの哲学の関係、知識と知恵の関係をはっきりさせることが、本段落の眼目であろう。科学も哲学も、人間の重要な知的営みである。

しかし、もし哲学がなければ、さまざまの科学の立体的な相互関係は偶然的・恣意的のままに放置されるであろうし、また個々の科学の意義はなきに等しいものとなるであろう。

そのような事態を避けるためには、どうすればよいのか。カントによれば、科学者自身が「科学的知識の眼」と「哲学的知恵の眼」の「両眼」をもたなければならないのである。しかし、残念なことに、科学者は「両眼」をもつことの必要不可欠性を理解しないのである。

人間の知恵は、平板に言えば、道徳論と幸福論の二部門からなるであろう。しかも、幸福論は道徳論によって先導されている、と見ることができる。したがって、科学者は、いつでもどこでも、道徳論と幸福論の総体(すなわち「人間の意味」)について、真剣に思索する必要がある、と言えるのではなからうか。

なお、「三つの問い」と「第四の問い」との「かわり」のなかに、カントの哲学的志向の、いわば「秘密」を見た著者の見解について、カントをよく知らぬ私は言うべきなにごともない。ただ、「三つの問い」の順序が何に基づいているのかは、考察に値すると思われる、とのみ付言しておきたい、と思う。

(続)